



No.24 2003.9.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

土木史ニュース	歴史的砂防施設の保存活用について	北河大次郎 1
フォーラム	土木史とアーカイブズ	安藤 正人 2
地域のニュース	碓氷峠鉄道施設 旧丸山変電所保存修理工事 宮崎県の土木遺産あれこれ	萩原 豊彦 3 高梨 弘久 3
海外土木史	オランダに滞在して	知野 泰明 4
学会の動き	第23回土木学会土木史研究発表会報告 土木史研究・論文集(審査付き論文)の投稿要領大幅改定について 土木史フォーラム小委員会平成15年度委員名簿	神吉 和夫 5 馬場 俊介 5 6
行事案内	平成15年度土木学会全国大会研究討論会	中井 祐 6
文化財ニュース	文化財となった土木構造物等一覧	北河大次郎 7
土木史関係図書	「とちぎの土木遺産」「水辺の土木とっておきの風景」ほか	横松 宗治 7

土木史ニュース

歴史的砂防施設の保存活用について

文化庁 北河大次郎

昨年度、国土交通省と文化庁は、「歴史的砂防施設の保存活用調査委員会」を設立し、地域活性化に資する有益な資産として歴史的砂防施設を適切に保存、活用していくための基本的な考え方などを検討し、その成果の一つとして、「歴史的砂防施設の保存活用ガイドライン」を策定した。ガイドラインについては平成15年5月に新聞等で報道されたので、ご存じの方もいるかもしれない。

土木学会は当調査事業を文化庁から受託し、土木史研究委員会に「中山間地域等における歴史的砂防施設の保存活用による地域活性化調査小委員会」を新たに設立するとともに、当小委員会の委員を中心として、前述の国土交通省・文化庁の合同委員会で実際に議論に参加した。

これまで、全国各地で個別の歴史的土木構造物を保存活用するための検討委員会などが組織され、現在もそれらのいくつかが進行中だが、今回のように土木行政と文化財保護行政の担当部局が中心となって、ある特定分野の構造物について包括的に保存・活用措置を検討する、という事業の枠組みが具体化したのは画期的なことである。

当小委員会では、近年急速に文化財登録の措置が進められている砂防分野に限定して、それらの保存

と活用に関する問題点を抽出した上で、施設の調査、評価、保存、活用に関する基本的な考え方の検討、さらには、実際に保存活用する上で求められる計画策定の手順などについて整理した。そして、ガイドラインには施設の現状把握、関連資料の収集などの調査を基本とした、歴史的砂防施設の有形文化財としての評価、保存の考え方が示され、施設の建設によって新たに創出された周辺環境を視野に入れた活用計画の策定手順などが盛り込まれた。内容の詳細については、

http://www.mlit.go.jp/river/sabo/kisya/200301_06/030526/030526.html

を参照していただきたい。

こうした一定の成果が提示できた一方で、文化財としての価値の維持と、防災施設としての機能維持を一元的に実施するための技術的課題などについては、十分に踏み込むことができず、今後は保存活用事例の蓄積を図りつつ、具体的な議論を深めていく必要があるといえよう。また、今回の調査を契機として、道路・河川・港湾・鉄道施設などの土木の他の分野においても、同種の調査を推進していくことが強く望まれるところである。

土木史とアーカイブズ

国文学研究資料館史料館/総合研究大学院大学
教授 安藤 正人



土木記録の公共性

私は20年くらい前からアーカイブズに関わる研究や運動に携わっているが、本誌に寄稿を求められたことによって、土木史という観点から改めてアーカイブズの大切さを自分なりに再認識することができたように思う。感謝申し上げます。

考えてみれば、土木事業・土木技術ほどアーカイブズに関わりの深い分野はないのではないかと。土木史研究の素材として、あるいは新規事業や技術開発の参考資料として過去の土木記録が役に立つ、という意味にとどまらない。現代のアーカイブズ理念からいうと、もっと重要なのは、土木記録が持つ強い公共的性格だ。Public Works, Civil Engineeringという英語表現に明らかなように、土木事業・土木技術は、まさに「公共」のため「市民」のためのものである。道路や橋梁建設、都市計画や治水工事人々の生活をより便利で豊かなものにするために、自然を開発し、景観を変え、人工施設を建設する。住民すべてに大きな影響を与える土木事業は、どれひとつとっても、民主的な手続きを経ずして、また社会的合意にもとづかずして進められるものはない（はずである）。土木事業・土木技術の記録を保存する第一義的な必要性は、実はここにある。つまり、土木記録を公共財として保存し情報公開することによって、市民が過去に行われた公共事業を子細に振り返り点検できるシステムを保障する。これこそが、土木記録に関するアーカイブズ活動の最も重要な役割ではないかと思うのである。

アーカイブズとは何か

アーカイブズとは、語源の archeion(ギリシャ語)あるいは archivum(ラテン語)（「第一の、あるいは最も重要な建物」という意味）が示すように、本来、国、地方自治体、企業、組合、宗教団体、大学等々、公私の団体が、自らの存在の証となり、かつ活動の基盤となるような経営記録を保存し活用するための“組織体の記憶装置”であって、単なる“古文書の保存庫”ではない。さらに近年は、記録の証拠性(エビデンス)を保障し、挙証説明責任(アカウンタビリティ)を実現することによって組織体の社会的役割を全うさせることこそ現代におけるアーカイブズの存在意義だとする考え方が、強く支持されるようになってきている。

日本では、こうした考え方は必ずしも広く理解されていないが、1987年の公文書館法制定以来、国と都道府県のアーカイブズはそれなりの発展を見せ、都道府県では現在27館ほどの(公)文書館が存在する。しかし市区町村レベルでは、やっと20館ほどに過ぎない。大学では、一昨年、京都大学が初めて事務局の行政文書をも継続的に受け入れる本格的な大学アーカイブズを設置した。企業では、企業史料協議会が長らく企業アーカイブズの普及に努めてきたが、日本銀行がアーカイブを設置するなど、注目すべき動きも見られる。団体としては立正佼正会が先ごろ佼正文書館を立ち上げ、初の宗教団体アーカイブズとして話題になった。ただ日本の場合、アーカイブズの専門職であるアーキビストがほとんど育っていないのが大きな問題である。アーキビスト養成課程の設置を検討している大学院もあるが、早急な実現を望みたいところだ。

日本の土木アーカイブズのために

再び土木史とアーカイブズの問題にかえると、土木記録の多くは、国や地方公共団体、特殊法人、企業などに広く分散して存在する。これらを一カ所に集めて「土木アーカイブズ」のような施設を作りたいという考え方もあろうが、それは好ましくないと思う。あくまで各団体・企業がそれぞれアーカイブズを設置し、自らの行政記録や経営記録を総合的に保存・公開する活動の一環として土木事業に関する記録も保存・公開していくというのが、アーカイブズの本来あるべき姿である。よって私は、すべての地方自治体や特殊法人、ならびに企業に対し、アーカイブズの早急な設置とアーキビストの配置を求めたい。本学会としても、地方自治体をはじめ土木・建設団体や関連企業などに対し、ぜひアーカイブズ設置の必要性を訴えていただきたい。

私の基本的な考え方は以上のとおりだが、土木記録に関する全国的情報センターとしての「土木アーカイブズ」のような施設は、むしろ必要かもしれない。情報だけに限らない。散逸の危機に瀕している土木史料の収集・保存や、アーカイブズの設置が困難な小団体や倒産企業の記録などを引き受けることもあっていいだろう。インターネットのホームページを見ただけで実際の訪問はないが、伝統あるイギリス土木学会のアーカイブズなどは良い参考になる。

碓氷峠鉄道施設 旧丸山変電所保存修理工事

松井田町福祉課(前・教育委員会文化財係) 萩原 豊彦

この煉瓦建造物は明治45(1911)年5月、我が国幹線鉄道初の電気機関車による電化に際し、横川発電所(現存せず)から送電された6600Vの交流電気を直流650Vに変成・供給するため建設された。機械室・蓄電池室からなる2棟は、昭和38(1963)年9月まで横川-軽井沢間の列車運行を支えていたが、この間60年以上に亘る電気鉄道技術の発展とともに、それぞれの機能・構造を変更しつつ、役割を果たしていた。しかし、機能停止後凡そ40年間放置され、損傷が激しく屋根は抜け落ち建具類も朽ち果て、いわば廃墟と化していた。

復元のポイントは、その年代と構造補強の手法であった。2棟は、機能停止年代の差によって改造法が異なっていたが、変成・供給機能が補完し合い存在していた建造物の意義と年代の統一性を重視し、創建時とした。

保存と構造補強の宿命的な関連については、重要文化財としての価値を損ねず、活用時の支障を防ぐため工夫された。小屋組はアングルトラス梁で、妻

面上部とトラス梁は独立し、さらに、平入り中央開口部にペディメントを有し、X・Y両方向とも応力に対する弱点を有していた。このため、煉瓦壁面最上部の笠石から開口部下まで樹脂鉄筋を挿入するとともに、内壁四方にH形鋼を水平に緊結した。さらに、平行する2本の地中梁を設け両端からH形鋼を立ち上げ、その最上部と水平H形鋼を緊結する手法を用いた。この手法は、屋内に立ち上げた4本のH形鋼が視覚的に映るのみで、窓枠・漆喰壁を創建時に復元可能とし、重文の価値、活用への影響を最小限に押さえたと考えている。



旧丸山変電所(群馬県)

宮崎県の土木遺産あれこれ

(財)全国建設研修センター 高梨 弘久

このほど、当財団では宮崎県に現存する土木遺産100件を集録した『土木遺産を訪ねて-宮崎編-』を刊行したが、拙書の中から「え、こんなものも?」といった変わり種の土木遺産を紹介してみたい。

江戸時代の日向市細島は天領の港で、細島津口(港口)には幕府の鎖国政策による外国船を見張り、毎日出入りする漁船の積荷などをあらためるため、遠見御番所が置かれていた。その遺構として残る土台部分の石積みの上には、船ならぬ海を見張る国土地理院の「細島^{ほそしまけんちようじょう}駿潮場」が明治25年に設置され、いまも現役で稼働している。西洋建築風の駿潮場と和風の石積みが一つの構造物に見えるところが面白い。もしかしたら石積みがいまに残るのも、その上に駿潮場が設置されたお蔭かもしれない。

小林市東方の景勝地・三之宮峡の「青の洞門」を思わせる岩をくり抜いた11のトンネルをくぐると、渓谷を跨ぐ「橋満橋^{はしみつばし}」の優雅なアーチが望める。本橋は昭和18年架設のコンクリート橋(長さ17.0m、幅4.7m、高さ23.0m)で、特筆されるのは戦時中の鋼材不足を補うため、鉄筋の代わりに竹筋が用いら

れていることである。竹筋の引張強度は鉄筋の約半分、もしくは同等の竹もあると教えられて驚くが、最近ではほとんどが改良され、この種の橋が現存していること自体が非常に珍しい。

東臼杵郡西郷村の日陰山から延びる約4kmの稜線上に、明治10年に勃発した西南戦争ゆかりの台場が8つあったことが確認されている。その1つ「田代^{たしろ}の台場」は、編んだ竹の中に土を入れ盛土する工法が用いられ、コの字型の土塁(長さ9m×9m×7m、高さ1m)が100年以上を経過した今日も当時の姿で残っている。現在、台場一帯は雑木林になっているが、当時は萱の原野で見通しがよく、官軍を迎え撃つ絶好の地であったという。ただ、この方面の官軍が五ヶ瀬川戦線に向かったため実際に使用されることはなかった。

以上、宮崎県の土木遺産を変わり種という視点から3件紹介させていただいたが、その歴史性や先人たちの知恵や工夫を読み取るのも、土木遺産の楽しみ方である。

オランダに滞在して

日本大学工学部土木工学科 知野 泰明

今年初めから3ヶ月の間、渡欧する機会に恵まれた。日本大学の海外派遣研究員に選ばれた(というよりは当たった?)ことによる。研究題目は「欧州における河川技術史に関する研究」で、オランダ、フランス、ドイツの史料および現地調査を行った。調査結果はいずれ研究発表会にて世に出すとし、ここでは特にオランダでの行動と雑感を報告したい。

オランダでの滞在は1ヶ月半ほど。調査の目的は学生時代からの念願であった明治初頭のオランダ人技術者の足跡調査と、彼らが来日する前に学んだ知識、そして、同国の河川技術史であった。

滞在地はデルフト。ここにはドールン、エッシャー、ムルデルらが学んだ王立アカデミーが前身のデルフト工科大学がある。彼らの学問的素養を知るべく同大学の図書館を訪ねたが、いつしか興味はオランダの河川史に移ってしまった。そして同国の生活に慣れるにつれ調査範囲は、工科大の図書館から、オランダの首都デン・ハーグにある市立図書館、王立図書館、同公文書館へと広がった。もちろん書店、古書店の徘徊も忘れなかった。その成果は、日本へ送った50kgほどの小包となった。

もう1つの調査目的が蘭人工師の足跡調査である。調査といっても主に誕生の地とお墓の訪問。これは私の研究テーマに関連する人物について欠かせない行事であり、その癖はとうとう外国に及んだ。

まず訪れた地は、ブルメン市ハル村。ここはドールンが生まれた所。彼の父がいた教会の鐘が私を迎

えて?くれた。そこでドールンへの敬意を未だ忘れない福島県郡山市が贈った顕彰碑が待っていた。デレーケの生誕地、オランダ南西部のコリンズプラートを訪問。地域開発研究所の島崎武雄氏の勧めである。オランダの中でも低平地にあるデレーケの故郷の堤防に立ち、築堤職人の子であった彼の生立ちを振り返る(上林先生の名著を携えて)。

2人のお墓にも到達、エッシャーのお墓は家族墓地にあるらしい。リンドウの墓地は辿り着けず、縁がないと諦めた。

最後にムルデルの墓参。ようやく辿り着いたムルデルのお墓は、ほぼ真円に近い楕円の墓板(直径50cm程)そこには、16歳年下の奥さんの名も刻まれていた(29年後に没)。二人の名前の上にはリボンの彫刻が入っていた。あの気難しそうな山高帽姿が印象的なムルデルは、その彼を慕う妻と眠っていた。

世界遺産となったキンデル・ダイクの風車。その中でいまだ生活を営む人々が中を案内してくれる。それは表向きのこと。脇には最新鋭の排水ポンプがありながら、もしもを思うと風車から離れられないらしい。この牧歌的な国の人々は常に破堤洪水の恐怖と背中合わせであった。

オランダの風景は我が故郷の新潟平野を彷彿とさせた。しかし、治水への切実さは日本人よりもオランダの人々の方が重いように感じた。オランダで延々と広がる低平地を車窓から眺めているとデレーケが日本で見せた治水への情熱は、この故郷が芽生えさせたと思えなかった。



キンデル・ダイクの風車群

学会の動き

第23回土木学会土木史研究発表会報告

神戸大学工学部建設学科 神吉 和夫

去る6月18日・19日の両日、神戸の兵庫県民会館で開催。参加者総数は163名、内訳は土木系が149名(教育研究機関60名、役所24名、民間35名、学生28名、OB2名)、教育委員会関係が8名、その他が5名である。

今回、論文集と講演を分離するという土木史では初めての試みとなり、2日間・3会場が必要との予測と参加者のアクセスおよび会場費を考え、発表会場を兵庫県民会館とした。講演会場の収容人数は各350人(初日)、110人(2日目)、54人×2部屋(両日)。収容人数350人の県民ホールは一般市民も参加するシンポジウムを想定したためである。初日夕刻開催の懇親会会場は神戸の迎賓館ともいえる初代神戸市長旧宅内にある相楽園会館とした。

研究発表申込みは73件(最終的には68件)あり、各30分(質疑応答含む)の講演時間を確保した。初日の第一会場で1コマ空となったので、司会の黒田勝彦先生に自由に使っていただくことにし、番外として「神戸市における土木博物館構想への取り組み」(横野・神戸市)の発表が行われた。

発表は審査付き論文投稿に向けての予備審査的な性格も持っていたためか、各会場では活発な討議が行われた。司会者等からかなり厳しい質問、コメントが寄せられ、講演者も懸命に答えるという白熱した展開も多々みられた。初参加という方から、こんな活発で面白い講演会は初めてとの感想をもらった。

ただし、台風の影響等により講演者欠席が2件あり、当該セッションでは次講演を繰り上げ発表した。その結果、ある会場で目当ての講演を聴けなかった

参加者が大変立腹された。欠番の取扱いは次回までの検討課題となった。今回、PCプロジェクターを用いた発表が9件あった。事前に土木学会事務局の問い合わせがあり、機器持参、OHPも用意することを条件に許可になったが、今後増えるものと予想される。

懇親会は午後5時20分開宴、小林一郎幹事長の司会のもと、中村良夫委員長の挨拶、次いで開催校から道奥康治建設学科長より歓迎挨拶、佐藤馨一前委員長より乾杯の音頭と挨拶。参加者は予想の2倍近い80数名(無料のバイト学生10名含む)と大盛況となり、途中で宴会業者に料理と酒を追加注文した。途中、小原啓司氏による相楽園の説明があった。最後に次回開催学校が岡山大学と発表され、馬場俊介岡山大学教授より挨拶があり、午後7時30分過ぎ散会した。

前日の17日午後実施した見学会には22名が参加。見学先は、わが国初のコンクリート重力式ダムである布引貯水池・五本松堰堤、次いで建設された烏原貯水池・立ヶ畑堰堤、およびわが国初の河川トンネル・湊川隧道である。今回、神戸が開催地となったのはこれら歴史的土木構造物(いずれも土木学会近代土木遺産2000選の評価A)が、創設時に近い姿で見学できるためである。降水確率70%であったが曇天となり、かなり強行軍な見学にも関わらず無事終了できた。

発表会が盛大かつ無事に終了できたことについて、多くの関係者、兵庫県、神戸市ならびに参加者諸氏のご協力に対し感謝の意を表します。

土木史研究・論文集(審査付き論文)の投稿要領大幅改定について

土木史研究委員会副委員長 馬場 俊介(岡山大学)

今年度から審査付き論文の執筆方法が大幅に変更されておりますので、土木史フォーラムの読者の方々にも注意を喚起したいと思います。

要点はつぎの4点です。

審査付き論文の執筆に関わる正式な要項は第1回編集小委員会で決定後、8月中旬頃には土木史研究委員会のホームページに掲載・公開されます。

審査付き論文の提出締切日は平成15年9月末日(必着)です。

審査付き論文の内容は、第23回土木史研究発表会での講演内容を、そのまま吟味・修正されるのが最も自然な姿ですが、2つの講演用論文を1つにまとめたり、第22回土木史研究発表会以前の自由投稿論文に基づいてまとめられることも可能です。その際の条件は、過去の土木史研究発表会で一度は口頭発表されたものであること、「土木史研究」もしくは他機関の論文集に審査付きの形で掲載された来歴のないことの2点です。なお、この点に

については基本となる論文との関連を自己申告していただく予定です。

「第一著者は1論文に限定する」というこれまでの制約は撤廃致します。ただし、常識の枠を超えて、一人の方が作為的に第一著者に名

を連ねるような場合には、編集小委員会として是正をお願いすることがあります。

また、同一の組織が複数の名前で類似論文を多数提出されるような場合も、同様に致します。

土木史フォーラム小委員会平成15年度委員名簿

小委員長	横内 憲久 (日本大学)	地域委員	安達 實 (真柄建設株)
幹事長	知野 泰明 (日本大学)		有井 宏子 (大阪府庁大阪府教育委員会事務局)
常任委員	阿部 貴弘 (パンフィックコンサルタンツ株)		岡田 昌彰 (近畿大学)
	岡田 智秀 (日本大学)		清水 浩志郎 (秋田大学)
	橋本 光行 (JFEエンジニアリング株)		田中 邦博 (九州共立大学)
	日野 智 (北海道大学)		田中 尚人 (岐阜大学)
	榭山 清人 ((財)全国建設研修センター)		樋口 輝久 (岡山大学)
	山田 圭二郎 (セントラルコンサルタント株)		松山 正将 (東北工業大学)
	横松 宗治 (株)日本ランドデザイン)		宮本 裕 (岩手大学)

行事案内

平成15年度土木学会全国大会研究討論会

今秋、徳島大学において行われる平成15年度土木学会全国大会において、土木史研究委員会では以下の研究討論会を開催します。ふるってご参加ください。

詳しい内容、スケジュール等につきましては、土木学会ホームページ(<http://www.jsce.or.jp>)にてご確認ください。

日時：平成15年9月24日(水)16:30～18:15

会場：徳島大学 共-C301

タイトル

「幻の橋梁エンジニア・増田淳再発見」

主催：土木史研究委員会

座長：小林一郎(熊本大学)

パネリスト

福井次郎(独立行政法人土木研究所)

五十畑弘(JFEエンジニアリング株)

中井 祐(東京大学)

主旨

増田淳(1883-1947)は、大正末から昭和初期にかけて、主に県の嘱託技師として全国各地に多くの橋を設計した、民間のエンジニアである。

吉野川橋、穴吹橋、白髭橋など戦前を代表する橋の数々を設計しながら、増田に関する既往史料は極めて乏しく、これまでその足跡や仕事の価値、歴史的 position 等については、ほとんど語られてこなかった。しかし2002年秋、土木研究所において増田事務所の手になる橋の図面や設計計算書が多数発見され、今後増田の全貌を知る途が拓かれたのである。

本討論会では、今回の史料発見を機会に、また増田が吉野川橋、穴吹橋、三好橋等の代表作を徳島に残していることにもちなんで、増田という人物とその仕事に焦点を当てる。増田の仕事の歴史的価値や橋梁エンジニアとしての増田の個性について考えるとともに、増田という技術者の存在を通して見えてくる戦前日本の橋梁技術の諸相についても議論する。

(東京大学 中井 祐)

文化財ニュース

文化財となった土木構造等一覧

重要文化財（平成15年4月答申分）

名称	所在地	建設年代	特徴等
東京駅丸ノ内本屋	東京都千代田区	大正3年	明治の市区改正計画に基づき建設された首都東京を象徴する貴重な大規模煉瓦造建築物
美濃橋	岐阜県美濃市	大正5年	近代吊橋の要素を構造躯体全体に備えた、わが国で現存最古の近代吊橋
旧筑後川橋梁 (筑後川昇開橋)	福岡県大川市・佐賀県佐賀郡諸富町	昭和10年	専門を異にする技術者らの高度な協同作業のもとに実現した、鉄道可動橋建設技術の確立を表徴する遺構

登録有形文化財（平成15年5月答申分）

名称	所在地	建設年代	特徴等
央橋	茨城県常陸太田市	昭和12年	下路式RC造単アーチ橋で、いわゆるローゼ橋の初期の例
北甘発電所	群馬県富岡市	大正8年	機能的な意匠を基調としたRC造2階建の変電所
鬼谷川堰堤	福井県大野市	明治30年/ 明治33年改	大型の石を野面積し、中央部を縄弛みさせた砂防堰堤
櫻野埼灯台官舎	和歌山県西牟婁郡串本町	明治3年	石造、寄棟造で、わが国最初期のプラントン灯台の官舎

(文化庁 北河大次郎)

土木史関係図書

書名	著者・編者	発行所・発行年月	定価
とちぎの土木遺産	土木学会関東支部栃木会編	栃木県建設総合技術センター発行・2003年4月	(非売品)
・栃木県内の土木遺産を調査し、紹介したもの。構造物のみならず、街道や公園、軍事施設跡など、とちぎの地域性に関係する土木遺産を紹介している。編集主査：為国孝敏			
水辺の土木 とっておきの風景		INAX出版・2003年3月	¥1,500
・日本各地に現存する近代土木の中から、水にまつわる土木を厳選し、切実な用のために造られた構造物と水が織りなす景観を紹介する一冊。座談会/伊東孝、馬場俊介、松山巖			
橋のデザインと構造	Matthew Wells 著、綿貫透・橋本光行訳	丸善・2003年3月	¥12,000
・橋梁デザインの歴史を前半に述べる。後半は最近の興味深い30橋についてそのデザインと構造、建設技術を紹介する。			
土木遺産を訪ねて - 宮崎編 -		(財)全国建設研究センター発行・2003年5月	(非売品)
・宮崎県に現存する土木遺産を実際に調査し、諸元や現況を写真とともに紹介している。特に石造アーチ橋に焦点を当て、その保存・活用の問題にも切り込んでいる。			
建築の保存デザイン - 豊かに使い続けるための理念と実践	田原幸夫著	学芸出版社・2003年6月	¥2,500
・保存の理念を19世紀、20世紀のアテネ憲章から現代の日本までたどる。そして建築における活用の手法を「修復」、「置換」、「付加」そして「新たな手法」と分類して紹介する。土木遺産の活用にも示唆するものが多い。			
史学会シンポジウム叢書 工部省とその時代	鈴木淳著	山川出版社・2002年10月	¥4,000
・工部省は明治3年に設立された。お雇い外国人による近代技術の移入と、日本人技術者による国土開発の誕生をもたらして明治18年工部省はその使命を終えた。			
市民のための風景読本 風景考	進士五十八、畦倉実著、上田穎人写真	マルモ出版・2002年4月	¥1,800
庭園の島 21世紀日本のまちづくりモデル ガーデンアイランド下蒲刈	進士五十八、竹内弘之監修、進士五十八文、上田穎人写真	マルモ出版・2003年4月	¥1,800

(株)日本ランドデザイン 横松宗治

編集後記：今号より事務局を担当させていただくことになりました。小生の研究フィールドが「ウォーターフロントのまちづくり」ということもあり、日頃から港や海岸に存在する歴史的土木構造物には興味ありましたが、このフォーラムを通じて、港や海岸といった水辺から、さらに内陸の歴史的土木構造物にまで興味が広がっていきそうです。

楽しく読みやすいフォーラム編集を心がけてまいりますので、読者の皆様方には忌憚ないご意見ご要望をお寄せいただければ幸いです。

どうぞよろしく願いたします。 (岡田智秀)

土木史フォーラム No.24

監 修：土木学会土木史研究委員会

発 行：土木史フォーラム小委員会

代表者 横内 憲久（日本大学）

事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀

〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1

TEL&FAX.047-469-5427(直通)

Email : t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

<http://wf.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>

CONTENTS

-NEWS

About the Conservation and use of Historical Sabo Facilities KITAGAWA Daijiro 1

-FORUM

Civil Engineering History and Archives ANDO Masato 2

-LOCAL NEWS

Conservation of the Former Maruyama Substation HAGIWARA Toyohiko 3

Civil Engineering Heritages in Miyazaki TAKANASHI Hirohisa 3

-OVERSEAS NEWS

Report of Civil Engineering History in Holland CHINO Yasuaki 4

-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)

Report of 23rd Annual Meeting of CHSCE KANKI Kazuo 5

About the Revision of Contribution Regulations in
the Papers of Civil Engineering History BABA Shunsuke 5

Committee Member List 6

-What's On

Workshop in Annual Meeting JSCE NAKAI Yu 6

-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List KITAGAWA Daijiro 7

-BOOK GUIDE YOKOMATSU Muneharu 7